

【美川のおかえり祭】

北前船によってもたらされた山車文化

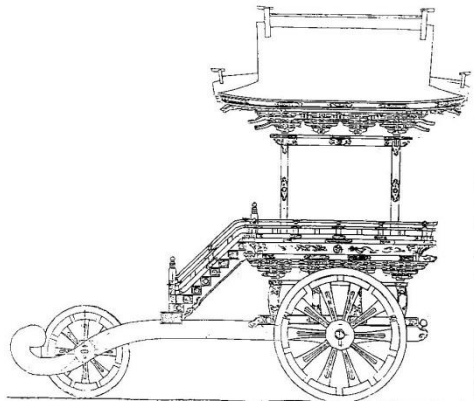


石川県白山市の美川地区は、日本海に面する砂丘上に築かれた湊町で、町の起源は戦国時代頃に遡る。元々、北前船の母港として栄えた町で、物資輸送が鉄道に変換するまでは、一級河川である手取川川岸に栄えた本吉港と対岸の今湊には、昭和初期頃まで膨大な数の北前船が並んでいた（享和三年には一年の出入り一五〇〇遭艘と書かれる）。本吉港には、明治五年の半年、石川県庁が置かれていた。美川のおかえり祭りは、白山市美川南町にある藤塚神社の春季例大祭で、毎年五月一九日の早朝から二〇日の深夜にかけて、神輿と山車（地元では「台車」という）、獅子舞が街中を巡幸する。「おかえり祭り」と呼ばれるようになったのは、神輿が二日目の夜、藤塚神社へ帰還する際に一〇町ある一町（「おかえり筋」という）を

開催本拠地／エリア 藤塚神社／白山市美川地区
開催日（通例） 5月19日～20日（平成30年）
（5月22日～20日が通例）
保存団体 美川おかえり祭りを守る会
山鉾屋台の数 13
参照 URL : www.fujitukajinja.com

とおおり、おかえり筋では、その家族、商売取引先、親戚などを招待して豪勢にふるまう風習がある事による。

藤塚神社は、もとのこの地を藤塚村と呼んでいたことによる。元々近世期は山王権現を祀り、藤塚日吉神社と称していた。神社は鬼門除けとされ、表鬼門は、おかえり祭り一日目で使用される高浜御旅所である。祭りは、一日目、裏鬼門である藤塚神社から、神輿を先頭に、一三基の山車（地元では「台車」と呼ぶ）が町中を渡御する。一日目二〇時三〇分から二二時三〇分過ぎ、高浜お旅所へ着く。その夜は、神輿、台車ともに一泊し、翌日の夕刻から翌朝の未明にかけて神輿と台車がおかえり筋を通って神社へ帰還する。一日目を神幸祭、二日目を還幸祭と呼んでいる。



台車側面図（中町）

神幸祭の神輿渡御は青年団が、還幸祭の祭礼は、神社役員、総代が担当する。神幸祭は、

以前は若衆と漁師であったが漁期と重なり出来なくなり、一時期在郷軍人に移行し、戦後、再び青年団となった。

台車は、一三基のうち一〇基は、各町内で受け持つ。その

うち、美川新町は町内の東・西組で各一基を持ち、その他に大工職人集団で「家方組」として一基、船大工職人で組織する「船職組」が一基を受け持つ。美川新町を除いて、九町会では、町内会が東西に分かれ組となり、隔年交互に当番となり、巡幸、後片づけまでを運営する。家方組、船職組は組の責任者が運営する。このほか、獅子舞が巡行するが、獅子舞は、悪魔払いの意味もある。

では、日程ごとに、祭を紹介する。祭の三週間前の四月下旬、宮司、神社役員、各町の台車当番の代表一同が、神社社務所に集まり、

諸協議の後、台車巡幸の順を決めるクジ引きを行う。一週間前の土曜日、午前一〇時に青年団が藤塚神社に集まり、神輿が神社拝殿に遷される。

神幸祭（二二日）

早朝五時二〇分、神社役員と紋付袴に白たすき掛け、日の丸鉢巻をまいた青年団員が藤塚神社へ集う。その後、神輿が拝殿から外に移され、団長が鳳凰を神輿の先端に取りつけると、ラッパが一斉に吹かれ神輿が「お出発」の合図となる。そして、神社から街中に繰



神幸町の傘型台車

り出していくが、神輿の前に神輿を警護する立場の錫杖持ちと右大臣及び左大臣と猿子の計四名と、悪魔払いの子獅子が先導して街中へ繰り出す。青年団は各家を回った際、に玄関先で、酒・飲食の歓迎を受ける。昭和四三年までは、各家の玄関前に悪魔払い用の砂山がしつられてあり、この砂山を悪

魔払いの獅子舞を演じる踊り子が、足で蹴散らかして行くことが通例であった。

獅子舞は、かつて本行事にあったとされるものを平成一四年に有志により復活させたもので、舞いやハヤシは他地域のもを写し、独自の獅子舞としている。獅子舞保存会が設立され、台車と同様に町内を各家々の玄関先で花を得て巡行するようになった。当祭の中心になっているのが、台車の巡行である。台車の文化がいつ頃からあったかは不明であるが、北町の台車に「文政八年」の銘があり、これ以前からあった事が証明される。台車は、前輪が一輪、後輪が二輪の構造となっている。上部の構造は、屋根が付く屋台形が五基、上部に円形の傘が付きその先に宝珠を飾るものが七基、神鏡を中央に設置し鳥居を付けたものが一基ある。船職組のものは屋台型であるが、土台部分が舟となっている。「文政八年」の記年銘がある北町の台車は、手力雄尊の人形を中央に設置した傘型の台車である。いずれの台車も金箔や漆、彫刻や推黒すいこく（漆の上に押型の装飾し金箔を貼る独自技法）、螺鈿等が施され、豪華な装飾となっている。これらの装飾は、北前船文化共に発展してきた仏壇製造業者の手によるも

のである。台車は、町内を巡行する際に、ギイギイと車輪がきしむ音を出しながら巡る。これは、準備の際、車輪の芯棒の回りに故意的に音が出るように菜種油をしみこませた木端を紐で巻きつけてあることによる。台車の中央部には人形と太鼓が設置されており、小学生が一〇名程人形の周囲と後部車輪軸の上に乗る。小学生は、太鼓を激しく打ち「ドドーコーノエージャ、エージャ」とかけ声をかけながら台車とともに巡行する。台車の中で、永代町のもは、傘型の下に巫女の装束を着た女兒が一〇名程乗り、太鼓を打ちながら祭り囃子を奏でる。神輿は、御旅所前で右旋左旋し、御旅所へ納められ、ご神体を大神輿に移す「神遷の儀」で一日目の神幸祭が終了する。

環幸祭（二三日）

還幸祭は、九時より高浜お旅所で実行役員が参列し始まる。一三時時かえり筋の町会で小獅子舞がある。大獅子（平成一四年から復興



青年団が進行しながらラッパをふきながら

ライマックスで、電光装飾された台車と担ぎ手が神輿や台車を故意的に揺さぶる。一番台車の今町が出ていったあと、一基ごとに同様の作法をして街中へ出ていく。おかえり筋の家々では、宴が開かれているが、そこへ、台車の担ぎ手が舞い込みもてなしを受ける。

したもの)は、一七時よりお旅所を出て町内を巡幸する。一八時には、日の丸鉢巻きをし、白たすき掛けの青年団が小姫公園に集まり、生年団旗を持った団員に導かれ、ラッパをふきながらお旅所への行進が行われる。青年団は、各メイン通りで止まり、旗手の乱舞を行う。旗とは「美川町青年団旗」で、乱舞の後には美川青年団の歌を合唱する。これば、戦前に一時在郷軍人が主催した事を受けての行事だが、今日ではこの祭りでは一番目立つ行事となっている。

一九時より、お旅所では台車の巡行が始まる。台車は鳥居前で、大きく右旋左旋し鳥居をくぐる。この行事が、この祭りのク

二〇時より「神遷しの儀」がお旅所で行われる。照明が消され宮司が足早にご神体を抱えるようにして外の神輿へ遷す。終了と同時に灯が点灯され神遷の儀が終了する。神輿の屋根先の鳳凰を差し込む役は、おかえり筋の代表が行う。神輿は、おかえり筋の男衆で担がれる。その後、神輿はお旅所の鳥居をくぐり、藤塚神社へ向け繰り出していく。その際、お旅所で大きく右旋左旋しながら鳥居をくぐる。こ神輿が、藤塚神社へ帰還するのは、午前〇時過ぎである。

二〇年前までは、この到着が、二四日の明け方であった。その後、藤塚神社へ到着後「神遷の儀」が行われ、二日間の祭りが終了する。

翌日以降、台車は神社委員や町内会当番により、飾り、人形、提灯等が取り外され、御旅所横の収納庫に納められる。修理が必要な台車は、この後、町内の仏壇店で修理される。

美川のおかえり祭は、北前船よりもたらされ、西日本の「山・鉾・屋台」祭の性格有する祭と言える。また、台車(山車)にも、北前船に持たされた仏壇工芸等さまざま技術が今日も活かされている。

(小阪 大)

新田實「石川郡美川郡美川のおかえり祭り」「石川の祭り・行事」平成二十一年石川県教育委員会

石川県石川郡自治協会「石川県石川郡誌」昭和二年